

2014年 第62代 理事長 西村 直樹
今日よりも明日を良くするために、
今、私たちにできることを全部やろう。



主な事業

松山春まつりお城まつり
愛媛マラソン支援事業
わんぱく相撲(まつやま場所・全国大会) 事業
わかつばきファンド管理・運用事業
道後温泉一番走り～湯上り頂上決戦～事業
まつやま市民シンポジウム事業
ことばを送る基金事業『ことばのちから～松山の地から～』事業
第63回全国大会松山大会
全国大会記念事業「おせったいブース」事業



社団法人松山青年会議所 2014年度理事長所信

社団法人松山青年会議所

西村直樹

はじめに

2011年3月11日に発災した東日本大震災。当時、松山青年会議所の専務理事の職をお預かりしていた私は、テレビのモニターに映し出される惨状を、どこかフィクションの世界の出来事のようにリアリティを感じられず、ただ茫然と眺めていた。親交の深い八戸青年会議所を心配し、連絡を試みたがすぐには繋がらず、夜遅くにかかってきた事務局長からの折り返しの電話、「現役メンバーの安否確認は取れたが、被災したメンバーも多く、特に港周辺の被害は甚大だ」との言葉に胸が詰まった。つい2ヶ月前、賀詞交換会に参加するため八戸を訪れた時に出迎えてくれた東北の同志の笑顔が、遠い過去に撮った写真のように色褪せて感じられた。

被災地では、多くの青年会議所メンバーが自らも被災し、仲間や家族の尊い命を失った悲しみを胸に抱えてなお、行政や社会福祉協議会等と連携して、今日生き残るために奔走し、バラバラになりかけた地域のコミュニティを支えた。日本中いや世界中の青年会議所が「がんばろうNIPPON 確かな一歩を踏み出そう」を旗印に、物的・経済的・人的支援を行ってきた。もちろん、青年会議所だけではなく日本中が東北の復旧・復興支援に一丸となった。

しかし、被災地は今も困難な状況にある。

私たちは、未だ、警戒区域に指定され自宅にも帰れず、復興どころか復旧すらままならない地域があることを忘れてはならない。そして、どんなに絶望的な状況にも明るい豊かな未来をつかもうと歯を食いしばっている同志がいることを知らなければならない。真の復興が果たされるその日まで、被災地に心を寄せ、ともに歩みを進めていきたい。

青年会議所の起源 —新日本の再建は我々青年の仕事である—

わが国は長期のデフレや世界的金融危機による経済不況、少子化による人口減少問題、領海侵犯により複雑さを増している外交・安全保障問題、地政学的リスクを抱えるエネルギー問題など、震災以前より、構造的な問題と解決しなければならない課題を多く抱えていた。それに加え、東日本大震災とその後の原子力発電所事故という未曾有の災害により、わが国は大きな岐路に立たされている。誰かが混沌とした時代を切り拓かなければならない。その新しい「震災後」時代の礎を築くのは、私たち青年の仕事である。

起源を辿れば、戦後の荒廃した日本を憂えた無名の青年が、「新日本の再建は我々青年の仕事である」という信念のもと、1949年9月3日、48名の同志を集め、どこの組織にも影響を受けないニュートラルな青年の団体として「東京青年商工会議所（現：東京青年会議所）」が設立されたのが青年会議所運動の始まりである。その後、大阪、前橋、函館、西宮、名古屋と青年会議所運動の灯が続々と広がっていった。各地の青年会議所の総合調整機関として日本青年会議所が誕生したのは、1年半後の1951年2月9日であった。

設立後、必要に応じて運動・事業は変わってきたが、その創始の精神は今もなお、連綿と受け継がれている。私たちは、青年らしい大胆な発想と溢れる情熱、フットワークの軽さと理想をかたちに変える実行力をもって、坂の上の雲をつかむがごとく前のめりに駆け上がることのできる団体である。

また、設立の経緯からも明らかなように、青年会議所という組織は中央集権的なものではなく、各地の青年会議所が独自の意思決定をもって、それぞれの地域に根ざした運動を展開している。私たちも、まつやまの明るい豊かな社会の実現（地域益）のために、自己修練を続けながら運動・事業を行っている。地域益を最大化するために、「井の中の蛙」とならないよう視野を広げなければならないが、その機会を提供しているのが日本青年会議所である。

日本青年会議所は、一部の職員を除き、会員である各地青年会議所のメンバーの出向によって組織され、国家青年会議所として日本全体の諸問題の解決に向けての運動・事業を行うとともに、会員に広く成長の機会を提供している。私たちは、2012年に日本青年会議所第61代会頭を務められた井川直樹先輩をはじめ、2007年以降、毎年多くの出向者を輩出し、研鑽を積んできた。本年は、日本青年会議所主催の全国大会を主管することで、私たちはさらに大きな成長の機会を得るとともに、これまで私たちが進めてきた運動・事業をさらに進化させていきたいと考えている。

全国大会とその後のまつやま

全国大会は、その年の日本青年会議所が進める運動・事業の集大成の場として非常に重要な大会である。第63回全国大会松山大会を、本年、いよいよ主管として取り組む一年が始まる。10月9日から12日までの大会4日間を成功させるとともに、記念事業等を通じて、行政・他団体・企業と連携し、多くの市民を巻き込み、私たちが行う全ての運動・事業を加速させていきたい。

1万5千人の青年経済人・文化人が登録し、日本最大級のコンベンションともいわれる青年会議所の全国大会はどのような大会であるべきなのか。1953年11月7日から2日間、名古屋の地で初めて第1回全国会員大会が開催され、全国大会の歴史が始まる。当時、日本青年会議所第4代会頭を務められていた服部禮次郎先輩は、大会を迎えるにあたり

次のように述べられている。

全国会員大会は全国のJC並びに全会員が自由に討論でき、お互いのコミュニケーションの円滑化を図るべき場である。

全国会員大会は単なる物見遊山でもなければ酒宴でもない。いわんやそれをダシにして羽目を外したりするためのものではない。主催者側は遠来の人を遇する法をよく研究し、人と人の接し方を検討し、参会者は地域の旧習にある程度の寛容を示しつつその改善を示唆し、ともに助けて、(1)人の迷惑にならず、人のためになる集会(会場の出入り集散等すべて外部の人から見てもなるほどJCの人たちは違うなあという印象を持たれるような集会)、(2) 参会したあとで参加者一同の胸の中に心の成長を感じるような集まり、(3) 参会したあと長くその土地の人によき感銘を与えるような集まりを持ちたい。

この基本理念は、公益性を鑑みて全国会員大会から「会員」の文字が消えた現在の全国大会にも継承し、大会構築への道標ともいうべき言葉である。この言葉を胸に、主管として、これまでの歴史に恥じない設営と松山らしさを存分に感じていただくための挑戦を行っていききたい。

また、これまでの全国大会に向けた取り組みは松山青年会議所を大きく進化させたと確信している。その道のりは決して平坦なものではなかったが、振り返ってみると困難に立ち向かうごとに大きな成長があった。また、全国の同志に伝えるために研究し、調べ上げたまつやまの魅力は、私たちに自信と誇りをもたせてくれた。PRや会議のために訪れた日本中、いや世界中のどのまちと比べても遜色はなかった。このまちのことがもっと好きになった。しかし、まつやまの抱える問題や課題がないわけではない。全国大会は通過点である。この機会を通じて、まつやまの魅力をもっと引き出し、磨き上げ、さらに輝かしいものにしていこう。

まちづくりの将来像と行政との連携

私たち松山青年会議所は、2010年に地域コミュニティビジョン、歴史文化ビジョン、ひとつづくりビジョン、地域振興ビジョンの4つのビジョンからなる「2020年まつやままちづくりビジョン」を策定した。本年度もビジョン達成のための運動・事業を展開するとともに、2015年度には想定期間の折り返しとなる5年目を迎えることから、中間検証への準備も進めていきたい。特に行政の掲げるまちづくりの将来像との共通項を探り、関係性を深め、時にはより良くするための提言も行っていくべきだと考えている。それにはまず、行政がどのような将来像を描き、どのような計画を立案し進めているかを理解していかなければならない。

松山市は、2013年3月、「『坂の上の雲』をめざして」というまちづくりの基本理念を継承しつつ新たに「人が集い 笑顔 広がる 幸せ実感都市 まつやま」を将来都市像に掲げ、第6次松山市総合計画を策定した。愛媛県も、2011年12月、「愛のくに 愛顔あふれる愛媛県」を基本理念に、第六次愛媛県長期計画「愛媛の未来づくりプラン」を策定し、実施している。

10年という長期間にわたる都市計画において、10年後を現役世代で迎えることになる私たち青年の果たさなければならない責任は非常に大きい。「松山春まつりお城まつり」や「まつやま市民シンポジウム」の共催をはじめ、私たちの先輩が松山市とともに創り上げ全国区の事業となった「俳句甲子園」など、松山市行政とのつながりが非常に深い私たちは、松山市に住み暮らす青年の代表として都市計画にも関わっていきたい。さらに、愛媛県行政とは近年は共催での事業展開は行われてきていなかったが、全国大会を一つの機会としてとらえ、新たな関係性を築いていきたいと考えている。

市民を魅了する運動、インパクトのある事業の展開

私たちが住み暮らすこの地域は、本年、歴史的に大きな節目の年を迎える。瀬戸内海国立公園指定80周年。道後温泉本館改築120周年。四国八十八カ所霊場開創1200年等である。その節目の年に、私たちは全国大会を主管し、大きな予算を使って記念事業を行う。この機会を確かなかたちに変え、一過性では終わらない魅力溢れる効果的な運動を展開し、インパクトのある記念事業の構築を行っていききたい。

松山市から委託を受け、他団体を巻き込み、例年であれば松山青年会議所の中で最大の予算規模を誇る事業が「松山春まつりお城まつり」である。当日は豪華絢爛な歴史文化の華咲く大名武者行列をはじめ、城山公園堀之内地区の事業やその他の関連事業と共に春の風物詩として市民の皆様幅広く認知されている。本年も引き続き、堀之内地区を市民のベンチマーク(基準点)としてとらえ、市民の集う憩いの場となるよう、事業展開を考えていきたい。

世界に誇る道後の温泉文化を発信する運動として、2012年度に松山青年会議所設立60周年を記念して開催した「道後一番走り」は、初の試みながら多くの市民を魅了し、マスコミにも大きく取り上げられた。第2回大会も、運営面で改善策を実施し進歩を遂げた。しかし、早朝という時間帯もあり、旅館や商店街の経済振興、そして道後の歴史と温泉文化を発信する機会としては、まだまだ検討の余地があると感じている。また、松山市と共催で開催している「まつやま市民シンポジウム」も、有名講師をお招きするメインフォーラムを柱

に、松山市の抱える問題や課題を解決する糸口に繋げる分科会を他団体と連携して開いている。本年は、この2つの事業を融合させ、相乗効果を発揮する事業として開催したいと考えている。

2011年度から対象年齢の拡大に取り組み、昨年は過去最高の参加人数を誇ったわんぱく相撲まつやま場所。本年も東京青年会議所が進める本事業に引き続き参加し、教育委員会や相撲連盟と協働で、まつやまの小学生に相撲を通じて心身の健全な成長を促す機会をつくっていきたいと考えている。本年は、例年までの開催理念に加え、「勝つために努力すること」の大切さを感じていただく取り組みをしていきたい。

2014年は、松山市長の任期満了に伴い松山市長選挙が行われる。これまで積極的に公開討論会・合同個人演説会を企画・運営してきたが、特定政党を支持しない青年の団体として、本年も有権者に政策本位の政治選択の意識を高め、投票率の向上に加え、自分たちのまちは自分たちでつくるという当事者意識を醸成する運動を展開したい。特に日本青年会議所が企画・運用している「eーみらせん」を活用し、同じテーマに対して同じ時間で各候補者の生の声を有権者に広く届けたい。

私たちの運動・事業の戦略的な発信

本気でこの国や住み暮らす地域を憂い、志をもった運動を行っていても、周知されなくてはただの自己満足でしかない。目的に向かって人の意識を変え、行動につなげることが運動であるならば、その内容を深め、市民から真に必要なコンテンツとして磨き上げるとともに、多くの市民を魅了し琴線に触れる効果的な発信が必要不可欠だ。発信が不十分であれば、運動を進めるための手段である事業の集客どころか、運動そのものを知っていただくことすらできない。本年は一貫性をもった広報戦略を行い、松山青年会議所の認知度を上げるとともに、事業への集客につなげ運動を発信し、数字による検証と改善を重ね、多くの市民を巻き込んだ運動を展開したい。

運動の本質を伝えることに成功しても、実際に対象者に動いてもらえるかどうかは別問題である。どのメディアを使って周知するか、知った人が興味関心を惹くキャッチコピーやデザインであるか、関心を持った人がその事業を検索したときにどのような情報が存在するか、実際に行動を起こすために十分な情報が記載されているか、行動し得たものをいかに他者に拡散・共有されるか等の段階を考え、「伝える」発信から「実際に動いていただける」発信へと進化させていきたい。

青年会議所の基本運動 一数はちからなり

その時代に必要とされている様々な運動・事業を展開する青年会議所であるが、私たちの基本運動は、同志を増やすことである。それは、世界中のJCIに加盟する全ての組織に

使命として定義づけられている、JCI MISSIONに明らかだ。

JCI MISSION

To provide development opportunities that empower young people to create positive change.

青年が積極的な変革を創造し開拓するために、能動的に活動できる機会を提供する。

青年会議所の展開する事業は、積極的な変革を創造し開拓するための公益に与するものでなければならないが、組織としての存在意義は、私たち青年に能動的な活動の機会を提供することである。多くの青年に活動の機会を提供するために会員を拡大し、そこで個人の指導力・人間力が開発され、成長した青年が巻き起こす運動により、社会に前向きな変化を生み出すのである。

そのためには、すべての事業に会員拡大に繋がるだけのインパクトが必要であるとともに、私たち自身の人間的成長が不可欠である。今まで松山青年会議所は、他に誇れる素晴らしい事業を多く展開してきた。また、魅力的な人間力を持った現役会員や卒業した先輩方は数多くいると確信している。自信を持って、共に切磋琢磨する同志を勧誘していきたい。

公益社団法人としての Re スタート

本年、私たち松山青年会議所は公益社団法人として生まれ変わる。公益社団法人として社会から大きな信頼を得る代わりに、より公益性の高い事業の構築、より公益比率の高い財務 体質が求められることになる。特に全国大会が開催される本年は、財政部門を強化し、これまで以上に事業の予算・決算を厳しく審査していくとともに、事業計画書の隅々まで法令違反がないか確認していきたい。また、全体の監査についても監事を外部から招聘し、より健全性の高い組織運営を行っていきたい。

また、真の意味で、市民から信頼される団体として認知していただくには、組織として当たり前のことを粛々と当たり前に進めていかなければならない。特に全国大会の主管を通じて、行政・他団体・企業・各地青年会議所との交流・連携が増える本年は、正確かつ迅速な対応が求められる。一つ一つは簡単でも、出来て当たり前、出来なければ信用を失うというシビアな状況下で信用を積み上げていくのはとても困難である。それだけに、運動を下支え する総務・渉外・事務局・財政局が担う役割の重要度は非常に高く、信頼されるに足る組織運営を行っていかなくてはならないと考えている。私たちの発することばにちからを与えるためにも、信頼される組織を確立していきたい。

その未来は次の未来へ

私たちは、2014年という多くの人の想いがこめられたひとつの未来に向け、大変な時間と労力をかけてここまで来た。先人たちが残してくれたこれまでの歩みに感謝し、2014年を主役として活動する私たちは、誇りとともにその重みを背負っていかなくてはならない。

知らないことはないと言われる賢者がいました。意地悪な少年がその賢者を困らせようと、小さな鳥を握り、「手の中の鳥はあなたが答えた後、生きているか、死んでいるか」と問いかけました。死んでいると答えればそのまま手を開き、生きていると答えれば、握り潰すつもりでした。賢者は答えました。「未来は君の手の中にある」

その未来は、生かすも殺すも私たちの手に委ねられている。私たち一人ひとりが「未来はこの手の中にある」という気概とこのまちを担う責任世代としての覚悟を持ち、時には青臭い夢を語りながらまつやまの未来を描いていこう。今よりもさらに輝かしい未来へと襻を渡すために、私たちなら、どんなことでも実現に向けてがむしゃらに歩いていける。

「青年」それはあらゆる価値の根源である。

そして、私たちは青年である。